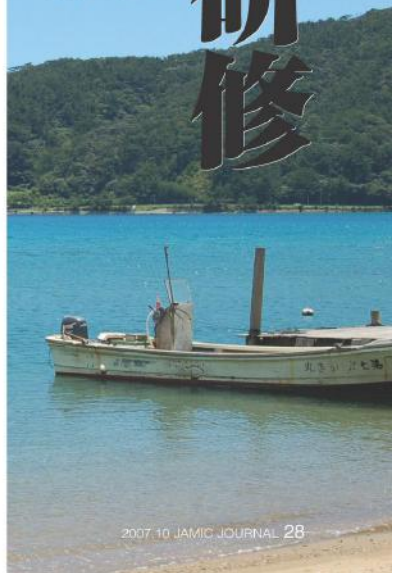


離島医療と医師研修

離島医療との出会い

新連載

千葉県立東金病院 古垣 斉 拓



はじめに

全12回の本連載で、離島診療所における医療活動と医師養成について報告していきたい。地域医療の危機といわれるなかで、離島・へき地医療の現状を一人でも多くの先生方に伝え、本連載が今後の地域医療を担う医師の養成や対策などの一助となれば幸いに思っています。離島・へき地医療の厳しさや楽しさ（医療人としての成長と充実）も併せて伝えていきたい。読者の皆さま、1年間、お付き合いください。

離島医療との出会い

鹿児島県・奄美大島は鹿児島県本土から約380km南西に位置しており、鹿児島市からフェリーで約12時間（飛行機で約50分）かかる。鹿児島県民医



診療圏が広く、訪問診療に4~5時間かかる場合もあるが、「患者様の自宅もわが病院」という気概を持ち、在宅医療にも力を入れている。島の加計呂麻島には貸し切り船で訪問診療に出かけていく。

療機関連合会（以下、民医連）では、医学生・看護学生に離島医療に触れてもらおうと、毎年夏に「離島フィールド」を行う。離島の住民や医療スタッフと触れ合うことで「島人（しまんちゅ）の思い」を感じてもらうことも目的である。フィールドでは、医療講演会、健康チェック、ケースワーク等を通して、実際に医学生や看護学生が慣れない手つきで血圧を測ったり、問診したりする。島人を変えた夜の交流会は大変に盛り上がり、しばしば翌日の

スケジュールに影響を及ぼすほどである。フィールドを通して医学生たちは離島医療の厳しさを知り、なかにはいつか離島・へき地医療に従事したいという者も出てくる。1996年夏、鹿児島大学医学部3年生であった私は、奄美大島を訪れ初めて離島医療の現場に触れた。フェリーで奄美市に到着して（船酔いをする者が続出、島の医療の歴史、文化、風土について学んだ。そして、奄美市から車で約1時間30

分かけて南下し、瀬戸内町にある南大島診療所を訪問した。当時はまだ交通事情が整っておらず、急峻な山道をバスに揺られながら瀬戸内町に到着（ここでも、車酔いをする者が続出）。診療所には卒後4~5年目の若手医師2人が所長・副所長として勤務していた。「地理的な離島はあっても、人の命に離島があってはならない」というスロガンのもと、恵まれない離島環境の中で若手医師やスタッフが奮闘している姿に深い感銘を受け、ぜひ離島で医師として仕事をしたいと決意したのを覚えている。それからちょうど10年後、私は南大島診療所の所長となった。

離島診療所の医療・福祉環境

南大島診療所は61年（昭和36年）8月6日に開設され、46年の歴史を持つ。鹿児島県民医連に加盟し、奄美医療生活

協同組合に属する19床の有床診療所だ。当診療所は、奄美大島北部にある奄美空港から車でおよそ2時間かけて南下した鹿児島県大島郡瀬戸内町にある。瀬戸内町は奄美大島南端に位置し、加計呂麻島・諸島・与路島など、離島の人の離島を抱えている。人口は約1万人だ（奄美群島全体の人口は約13万人）。町内では高齢化が年々進行しており、高齢化率は32・7%（06年8月時点）、さらに瀬戸内町は生活保護率が奄美群島で最も高く、保護率が68%にもほ

「地理的な離島はあっても、人の命に離島があってはならない」

る（05年度の全国平均保護率は11・7%）。鹿児島県の保護率は14・3%、奄美群島の保護率は42・2%である。その背景は、経済的基盤の弱さからくる若年者の人口流出と、鹿児島県の中でも進行の速い高齢化や高い離婚率等の社会的要因、奄美の基幹産業といわれる大島船の低迷による所得の減少等の経済的要因が挙げられている。当診療所の保険別外来患者の割合比率は国保60%、社保25%、生保15%で、生保の患者の占める割合が非常に高くなっている。瀬戸内町内の他の医療機関としては民間病院（内科・外科60床）、瀬戸内町立診療所（内科19床、民間

の診療所（整形外科19床）、精神科の民間病院（212床）が主な連携機関である。町内には常勤医師が約10人、人口1000人あたり医師一人となっている。

離島の重装備診療所と医師体制

当診療所では、常勤医師2人、正規

職員15人、事務・看護師・臨床検査技師・放射線技師・管理栄養士、非正規職員8人の計25人で、19床の診療所活動を行っている。04年7月に現在の場所に新築移転し、外来では電子カルテが稼働している。X線（月間平均192・5件）、ヘリカルCT（月間平均137・5件）、上部消化管内視鏡検査（月間平均20・7件）、超音波検

査（月間平均82件）等の各医療装置を備えている。放射線技師が不在の時には医師が単純X線・ヘリカルCTを撮ることもある。さらに、人工呼吸器を病棟で使用することもあり、離島における、まさに「小さな病院」だ。また、当診療所の勤務医は、鹿児島県民医連に属しているもので、鹿児島県民連内の病院で初期・後期研修を修了した卒後4~6年目の若手医師が離島診療所（当診療所および徳之島診療所）を担う。診療所では初年度に副所長、2年目に所長として勤務する。午前中は両医師共に外来診療を、午後は一人が訪問診療を行い、他方が外来診療を行う。病棟回診等は早朝と昼休み、夜間に行う。さらに夜間は交互に宅直し、自宅で病棟対応や深夜の急患に備えている。まさに体力勝負の勤務といえる。今回はこのような離島診療所の医療活動（外来・病棟・在宅医療）の現状について報告したい。

■古垣 斉 拓（るがき、なりひろ）
1972年鹿児島県生まれ。01年3月、鹿児島大学医学部卒業。鹿児島県立病院で初期研修を行い、その後4年間にわたり鹿児島県奄美大島南大島診療所に従事した。06年4月、奄美医療生活協同組合常勤理事・南大島診療所所長。07年4月より千葉県立東金病院地域医療連携管理室長。

％＝100分の1の割合を示す単位（1％＝01％）



鹿児島県
奄美大島

